合となつている。これ等の持つ各特徴を東亜温帯産の種類に就いて検討すると，著しく変化して外形的には連続することが多い。その一部は環境条件の変化に伴うものと十分考えられるので，ある程度共通した良い特徴というものも見出し難い。唯欧亜大陸産の種類の中，東亜特産のツメクサと北米大陸太平洋岸に共通するハマツメクサのみ種子背面が無溝であり，ヨーロッパのみあるいは東方へ広布する種類では有溝なのが面白い点と思う。今日まで花部の4数性と5数性とを基として，習慣的に属を2分して来た。これはある程度当るのであるが，5数性のチシマツメクサには時折4数の花が見られ，4数性のアライトツメクサでも5数を示すことがある。シムシュツメクサに至つては4乃至5数で，前者の場合が多いらしいが不安定である。染色体数も6, 9, 11というような基本数を想定出来，寒帯には高次の倍数体と目される種類もあるが，それの外形的規制には困難がある。なお軽微ながら性分化があるに相違ないが，それに就いては従来多くを知られてはいないようである。花は虫媒であると同時に豊富な閉鎖花による自花受粉も行われ，他種類との交雑も決して稀ではないらしい。

大凡以上の事が錯綜して個体の表現型を成し，しかも分布には人為の影響も多いと信じられる為，分布圏と形態分化とを純自然的な産物としては扱い難い。これを要するに，形態的にも細胞的にも不安定状態に在り，分類困難の群に数え得るのではあるまいか？然しこの度は習慣に従つて属内を2列に区分する立場を取つて置く。外部形態，染色体の両面を併せ考えれば，欧亜産の種類で集合種あるいは上種といつたまとまりを摑めぬではないが，これは熱帯及び南半球から記載されたものの詳細も判明した暁の仕事とすべきであろう。　　（つづく）

○高等植物分布資料（14） Materials for the distribution of vascular plants in Japan (14)

○イナベアザミ *Cirsium Magofukui* Kitam.　本種は伊勢員弁（イナベ）郡治田（ハツタ）村の治田山（石灰岩地）で1933年に採集され，北村教授により翌年発表された。以降25年間他所に産するとの報告を知らない。然し井波一雄氏は治田山のすぐ北の藤原村多志田谷（石灰岩地）で1959年の秋に見出されたという。ところが此の稀品が信州上伊那郡伊那里村小瀬戸（約500 m の地）に産するのを知った。同郡高遠町在住の柄山祐希（カラヤマユウキ）氏が1957年10月8日に採られたものである。小瀬戸谷は粘板岩脈の上に石灰岩脈が走り，その上をロームが薄く被い，谷の床部を石灰岩塊と粘板岩の砂礫が埋めているという。イナベアザミはそのような場所に生えていたらしい。此の点は伊勢の産地と軌を一にし，残存分子的な感がある。本品の腊葉は頭花の大さや総包の概形に於てサワアザミやモリアザミに類するが，総包葉の縁に小刺を列生する点で断然異る。邦産アザミ属の中で此の形質は本種特有のものとされておる故，他の形質で余程違うのでない限りイナベアザミとして良いであろう。鳥居喜一氏が言われる遠州水窪（ミサクボ）町長尾～瀬戸野にて採集の一品もこれではないかと思える。

末筆ながら御教示を仰いだ杉本順一，大村敏朗，井波一雄，鳥居喜一の諸氏に御礼申し上げます。（東京都立大学理学部，牧野標本館，水島正美）